

## 英語選択授業における学生との探究的実践（EP）の試み

Empowering Students in the Elective English Class with Exploratory Practice

杉野 俊子

SUGINO, Toshiko

### はじめに

教師の信条は、教育態度や教育方針などに影響を与えるため、教員の能力や資質と伴に大事な点と1980年代に注目され始めた。これは、研究の1つのカテゴリーと考えられる。

教師の信条に関する研究手法としては、1980年代の実験研究や1990年代のアクション・リサーチを経て、2000年代は教師の信条を含め、学生の理解の深化と、教師と学生の相互の成長、そして実践者が探求者になることを目指す探究的実践（Exploratory Practice、以下EP）という研究手法が紹介された。

本論では、教師の信条と探究的実践（EP：Exploratory Practice）の定義と実践例について述べた後、2019年度後期に担当した、本学の英語選択科目の1つのワールドカルチャーの授業について紹介する。学生は、教科書の学習と、補足資料やDVDで言語・歴史事情や少数派・移民について学習した後、自ら選んだ国でのバーチャルボランティアの体験を発表やレポートの形で表した。実践研究の手法である教師信条とEPの枠組みを使って、協働実践者としての学生の理解の深化を考察する。

### 1. 教師の信条（Teachers' beliefs）

国際教育フォーラム（2013）は、外国語学習の目安として、「ことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀に生きる力を育てる」という教育目標を定めた。ここで、教師が持っている理念・信条が大事になるのは、それらが自身の意識・教育態度、教育法や教育方針等に影響を与えるからであり、「教育や学習について、教師がそれまでの経験を通して構築してきた考え方で、教師の意思決定と授業実践に影響を与えるもの」と定義づけられている（西

野 2011：133）。

教育の過程を理解して改善するためには、教師の信条とそれに伴う実践と心構えが大事になる。それらは、教師が直面する問題にどのように対処するかという方略や、教師の肉体的・精神的健全性に密接に関連しているため、必然的に生徒のやる気や成績に影響を与える（OECD 2009, p. 89）。

実践に影響を及ぼす様々な要因を探る研究を「教師認知（Teacher Cognition）研究」と定義した Borg（2001）はまた、信条は、人生の多くの面において重要な役割を果たすと述べている。Borg（2006）は言語教師認知に焦点をあて、「言語教師認知が学習経験、教職専門研修、教育環境、授業実践などと複雑に関係し、影響し合いながら構築され、さらに再構築されることを示唆」した。（西野 2011：133）。

Sugino, Ueda 他（2018）の先行研究で、13名の被験者である語学教師は、各々の自分の信条に基づいて、できるだけそれを語学の授業に取り入れているという結果が出た。英語教育の場合、英語能力は自動的に国際的・国際人と結びつけられる傾向がある。筆者の教師信条は、英語能力にかかわらず、「真の意味の国際人は、豊かな教養に裏打ちされた-ism（差別意識）のない人と言えるので、そのような人間性を涵養する英語教育を目指したい」である。また、その過程で、「英語力だけでなく、より高い思考力を身につける」という総合的学びも目指してきた。その一例として、一般英語の教科書に「White Day」という単語が出てきた場合、なぜその言葉が日本以外では問題になるのかを、racism（人種差別主義）に関連させて学生に考えさせる、などがある。

しかしながら、学生の英語力や人数などの教室環境、シラバスや設備のような学校環境により、教師の信条と実践とにずれが生じる場合がある（西野 2011）。筆者も、専門やそれに準ずる授業を担当した時は-ism

に特化して教えることができたが、一般教養の英語の授業ではほとんどが簡単な説明で終わってしまい、高い思考力の構築は十分に出来ていなかった。

このような教師の信条が有効的に授業に反映出来た時、学生にとって非常に有益であることは、西野(2011)、杉野(2016)、Dogruue 他(2010)、蒲原(2020)など多くの研究で報告されている。筆者の教師信条を生かしながら、本学の学生に呼応した英語教育を模索している中、教師も学生も成長できる実践的研究手法、Exploratory Practice (探究的実践) を見いだした。

## 2. Exploratory Practice (探究的実践) とは何か

Exploratory Practice (探究的実践、以下 EP) は、従来の、データを基にした実験研究 (SR) とアクション・リサーチ (AR) の流れを受けて発展したものである。当初、ブラジルのリオデジャネイロの現場の教師たちが、科学的研究に限界を感じて、自分達たちの思考や行動に則した、実践者研究 (practitioner research) として生まれたのが EP である。

### 2. 1 EP が生まれた背景

認知心理学的なデータを使った実験研究 (Scientific Research, SR) が、英語教育界でも定着したのが1980年代である。柳瀬 (2008) は、「SR が目指しているのはあくまで授業に関する一般法則の発見であり、一般法則の定立のために実験計画法にできるだけ忠実な実験を厳密に実行し、その結果の法則を、英語教師が従うべき規範として呈示しようとした (73)」。そのために、実験研究の実施が教育実践への介入となり、教育活動の中断となってしまうという欠点も指摘されている (佐藤 1992)。

1990年代になると、アクション・リサーチ (Action Research, AR) という研究手法が、社会における問題解決を図るための手段として、社会学・教育学・心理学・看護学などの分野で広まってきた。AR の実施手順は、1. 現状把握 2. テーマの明確化 3. 予備調査 4. トピックの絞込み 5. 仮説設定 6. 計画 7. 実践 8. 検証 9. 内省 10. 発表からなる10のステップで、教師が教室での指導や学習の理解を深めたり、教室での実践を変革したりする目的で、みずから授業内で行う調査であると定義されている (三上 2015)。たとえば、三上 (2015) は、AR の実践を通して、自らの授業実践に対する内省と理解を深め、必要な改善を重ねた上で、より効果的な英語授業の実現を目指す試みを行った。しかしこの課題研究型 AR の欠点は、AR を行うことを事実上強制された

場合、AR の過剰負担に憔悴した教員が、授業の内容より研究の充実に走ろうとすることであると柳瀬 (2008) は指摘している。

このように SR と AR が実践感覚から離れ始めた頃、従来の研究に限界を感じ始めていた英国のランカスター大学の Allwright が、ブラジルで現職の教師達と関わった際に、現実に即している実践研究として EP (探究的実践) の発想を得た (Hanks 2017; Slimani-Rolls & Kiely 2019)。

### 2. 2 EP の定義と特徴

EP (探究的な実践) の枠組みは、前述のように、1990年代に Allwright とリオデジャネイロカトリック大学 (PUC-Rio) の I. K. Miller とその同僚達の協力で生まれたものである (Hanks 2017; Slimani-Rolls & Kiely 2019)。

EP は持続的で恒常的な概念を持った、実践授業を研究対象とする研究手法として、Allwright とリオのカルトゥーラ・イングレサ語学学校 (Cultural Inglesa, Rio de Janeiro) やリオ・カルトゥーラ (the Rio Cultural) の協働実践活動を通し、さらに定着していく (Allwright & Lenzuen 1997)。Allwright と Lenzuen はその論文の中で8つの基本的ステップをマニュアル化した。最初の3つは「問いかけ領域 (puzzle area)」に関するもので、まず「問いかけ (puzzle)」を明確化し、それに見合った「解決方法 (attempt)」を決め、思考やディスカッションを通して理解を深めて行き、暫定的に到達した系統的な理解 (formulation of the understanding) を特定する。4-5は、さらに調査するために適当な実践方法を適応させる。6. 実際にクラスで探求してみる。7. 結果の分析と解釈をする。8. 新たな理解の示唆と、他の研究者に相談したり、研究を発表したりすることも含めた新たな計画、である。

しかし、このようなマニュアル化は、ふたたび現職教師の思考や行動と遊離し始めたので、現在では簡素化された次の4つのステップとなっている。

1. 問いかけ (puzzle) — なぜこのクラスは〇〇なのか。その問いを解くためにどんな授業方法を使うか。
2. 方法 (method) — (1) 授業方法 (慣れている手法を使う。例: ロールプレイ, 授業内討論, グループ活動, 協同探究など) (2) データ収集方法 (観察、ログ、録画、書面によるフィードバック、学習者フィードバックなど)
3. 内省、解釈
4. 示唆 (Griffo 2017; Pandhiani 他2016)

以上のステップは、緩く決められている示唆のようなものなので、順序も時系列的ではなく同時に起きてもよいと Pandhiani 他 2 名 (2016) は述べている。実際彼らは 3 と 4 を合わせて、1-3 のステップを推薦している。

EP とアクション・リサーチは両者とも担当授業を研究対象とする点は同じである。しかし、EP はアクション・リサーチのように、最初から研究結果を得るために行うものではなく、深化した探究的視野で、授業内で起きていることを理解し、教えや学びをスムーズにする事を目的としている (Hanks 2017 ; Slimani-Rolls & Kiely 2019)。EP では、学習者は「participant データ提供者」でも「problem-solver (解決すべき) 問題」でもなく、授業内で教師と共に「問いかけ」を解決し、協働で理解の深化を目指す、「co-researcher (共同研究者)」や「collaborative worker (協働実践者)」と見なされる (Hanks, 2017 ; Pandhiani 他 2016)。つまり、EP は、SR やアクション・リサーチのように、「一般法則 (generalizable truth)」を見つけることではなく「局在的な環境に合った理解 (localized understanding)」を見つけることであると言える (Pandhiani 他、2016)。

EP の定義はまだ流動的であるが、学習が互いの問い掛け (inquisitiveness) から始まり、率直に話し合える姿勢をもち、教師自身が、すべての解決法や答えを持っていないことを認めた上で、答えを見つけ出そうとする過程や内省と、授業と研究が一体化するが大事だと位置づけている。(Hanks 2017 ; Slimani-Rolls & Kiely 2019)。

最後に、EP (探究的实践) で最も重視していることは、「人生の豊かさ Quality of Life (in class)」である (Allwright & Hanks 2009)。EP は最終的に、「英語教育に関係する学習者、教師などのすべての人間の (教室での) 生活・暮らし・活気の質を大切に考え、両者がそれぞれ成長すること」を目指している (柳瀬 2008 : p. 74)。

### 2. 3 EP の授業実践報告

EP は通常単独で行わない。具体的な「問いかけ」の例として、「外国語の授業で母語をどの程度使うか」、「学生がなぜ特定の活動に拒否反応を示すのか」、「授業中になぜお喋りをしているのか」、などについて「疑問」をもち、なぜ授業内で騒ぐのかを学生と教師が協働で解決していき、その過程をまとめて何かの形で発表するというものである (Griffo 2017 ; Slimani-Rolls & Kiely 2019)。Slimani-Rolls & Kiely (2019) はまた、教師の生涯教育や教員養成の場で

EP の実践の導入が役立つことを紹介している。

日本の例では、独自に開発された EP プロジェクトが英語の授業のチームティーチング環境下で働く言語教師の活動や考え方に関し、教師・研究者としての主体性を促し、責任感を増幅すること、つまり彼らのエージェンシー<sup>(註1)</sup>を高めることが判明したと報告している (平塚 2015)。

他国の実践授業として、英国リーズで行われた 2015 年の EP を使った研究大会では、EP の定義の理解の難しさも吐露されたが、教え・学びに対してこのような倫理的で協働的で尊敬の念を持ったアプローチは、教師や生徒だけでなく家族や教育心理学者など他の分野の人達にも有益になり得る、という共通の声が聞かれた (Hanks & others 2015)。

## 3. ワールドカルチャー 2019 年後期授業

### 3. 1 本学での EP 実践の背景

1970 年代から広がったグローバル化 (globalization) という現象は、従来の国家や地域の境界を越えて、ヒト・モノ・カネの移動をもたらした。その結果、英国や米国では移民が増大し、その対応策として ESL (English as a Second Language) が発達した。ESL の教授法や教材は、日本の英語教育 (English as a Foreign Language : EFL) に影響を与えたが、同時に、英語母語話者や英語の偏重や、英語話者内の言語格差などをもたらした (杉野 2020)。

筆者も ESL 教授法の学位取得後、「読む・書く・聞く・話す」のスキルを伸ばす研究や、専門性を生かす英語教育 (English as a Specific Purpose : ESP) や、教師や学生のやる気度、自律学習、学術英語 (Academic English) の研究を経て、高次の思考力を養う批判的教育学 (critical pedagogy) を応用した教育と研究を重ねてきた。

専門教科の授業とはことになって、教養教育としての一般英語の授業は、レベルや教科書が大学指定の場合が多く、特に TOEIC など英語検定科目を担当した場合は、思考力をつける授業は困難だった。そこで、2012 年から、初・中級程度の学生用に、アメリカの少数言語派についての概念と英語学習 (スキル) を結びつける教科書を作成し、授業実践を行ってきた (杉野 2016)。

専任職 20 年を含めた 40 年余の教員生活も終わりに近づく中、この探究的实践 (EP) にたどりついたのは、Allwright が試行錯誤の末にたどり着いた研究の軌跡と共通するものがある。



### 3. 2 受講者と授業目的

2017年から本学で英語総合 (I, II) を担当してきた。本学の学生の服飾に関する興味と英語力は多様である。特に英語に関しては、和田 (2010) も指摘しているように、英語単語や句レベルにとどまっている学生から、帰国子女や英語圏で短期留学をしてきたものもいる。

2019年から担当してきたワールドカルチャー (2 学年選択授業) の受講者70名の英語レベルや受講態度ややる気も様々だった。前期では、大人数で横に長い教室で目が行き届きにくいせい、スマホ、おしゃべり、居眠りが散見された。また、電車の遅延による遅刻も頻繁に起きた。これは周りの学生にも迷惑になる上、教師のやる気度を下げる要因になる (Sugino Abe 他, 2017)。

前期の反省を踏まえてスタートした後期のシラバスの授業方針と概要は以下の通りである。

世界の最新の出来事やトピックについて、メディア教材を使って学び、国際社会情勢、異文化コミュニケーション、諸外国文化事情について知識を深めます。留学・インターンシップ・ボランティアといった明確な活動意識をもって海外に出かける架空の若者の姿を通し、語い、リスニング・ライティング・リーディングなどの英語力と異文化理解能力を高めて行きます。

受講登録者数70名の内訳は、4 年生 3 人、3 年生 10 人、2 年生 57 人だった。その内、最後まで履修し単位を習得した学生は 51 人だった<sup>(註2)</sup>。単位未習得 20 名の 2 名以外は出席不足だった。学科はモードクリエーション、流通イノベーション、テキスタイル、プロダクト、マネジメント、インダストリアル、服飾表現学科に渡った。

受講生の多くは、英語学習に関しては英語そのもの (語いや文法) の学習であり、文化については衣食住や観光についての学習だと思っていた。受講条件に英語の到達度がないため、前述のように (和田 2010) 英語に対し非常に苦手意識を持っている学生もいれば、短期留学経験者や、英語が堪能な留学生もいた。

英語到達度だけでなく、受講動機や態度も多様であった。単位のためだけに受講した学生、教科書未購入の学生、英語到達度は低い文化に興味を持っている学生、読み書き能力はあるが教師の質問に答えられない・答えたくない学生など、実に多様だった。数名の学生は、前期・後期の通年で履修していた。

### 3. 3. 教材・評価・授業の進め方

教科書は15章からなる『英語で世界に橋を架けようー海外で学ぶ・働く・異文化を知るための総合英語ー』(南雲堂)で、各章は 1. 語い 2. リーディングの内容の紹介 (5-6 行の英文) 3. Reading (約 1 頁) 4. Listening 5. Collocations (実用的な文の使い方)、6. Writing と、文化に関するコラムがある。

前期にこの教科書の前半を使い、後期には後半を学習した。前期受講生には、多少高度すぎたという印象がある。CD はついているが、DVD はついていなかったため、内容に関連したものを視覚的に紹介する必要があった。教科書を購入していない学生も多く、毎回のプリント教材で補った。

後期は Chapter 7. (カナダのバンクーバー)、8. (オーストラリア、パース)、9. (U.K. エジンバラ)、10. (シンガポール)、11. (アイルランド、ダブリン)、12. (アメリカ、ワシントン DC)、13. (スウェーデン、ストックホルム)、14. (フィリピンのボランティア活動)、15. (ボランティア船) である。実はこの教科書は、前期の Part I (Chapter 1-6) と、Part II (chapter 7-12) は同じ国を取り扱っている。Part II では、Part I で登場した学生と新たに海外で学びたいという学生が、留学に関して話し合いをするという設定になっている。

各章は、このまま教科書通りに授業を進めていっても十分な量の内容だが、毎回補助教材を配布し、それを提出することで、出席と平常点 (宿題と課題点) の加点とした。

## 4. 探究的实践 (EP) としての授業の進め方

### 4. 1 問いかけ (inquiry)<sup>(註3)</sup>

EP としての「問いかけ (inquiry)」は、このクラスの現状を踏まえ、「どのように学習者の英語力をあげながら持続可能な多様性と包括的な文化観を持てもらえるか」である。

この問いかけは、教師信条である、-ism (差別主義) を教え、学習者の気づきを促すことを前提としている。

### 4. 2 方法

問いかけに答えていく方法として、教科書の語いや文法項目やリーディング問題の他に、関連文化についての補足や考え方を高めるための補助教材を使った。第 1-7 週目の導入を経て、第 8-15 週目のバーチャルボランティア活動の補助教材を増加した。

補助教材の1枚は activity sheet とし、名前、宿題・予習の自己申告の後に、意見や小課題を提出してもらった。補助教材の英語と日本語の比率は3：7程度だった。

DVD の映像は、大衆文化を表す時は教科書用として作成された物を、概念の時は、なるべく実話に基づいたもので、社会や歴史的現象を表す中立的な DVD の一部（10－15分）を使用した。以下は各週の授業の構成である。

#### 第1週目（カナダ、バンクーバー）

- ①簡単な自己紹介（英語の記述部分でレベルを判断。8行中、実際書いたのは単純な文で2－3行）  
Canada について予備知識（首都、大きさ、公用語）

#### 第2週目（カナダ、バンクーバー）

- ①バンクーバーでお勧めの観光スポット（後半英語）
- ②バンクーバーが「ホンクーバー」と呼ばれた理由  
カナダはどうして英語と仏語が公用語なのか。  
カナダも米国も移民国と呼ばれているが違いは？  
カナダについて一番知りたいことを調べてくる。  
（②は、自分で考え提出。詳細は次週に）

#### 第3週目（カナダ・バンクーバー）

- ①教科書の内容から小テスト（語い、内容確認、なぜ「ホンクーバ」と呼ばれたか（英文要約）

#### 第4週目（カナダ・バンクーバー、オーストラリア・パース）

- ①カナダ先住民の言語維持
- ②カナダについて調べてきたことのミニ発表  
ミニ発表に関するノートテイキング。  
カナダ移民と二言語事情の映像の感想  
カナダとオーストラリアの共通点と相違点は何か。

#### 第5週目（オーストラリア・パース）

- ①ホンクーバの解答、前回の映像の解説（日本語）  
A brief history of Australia
- ②ゴールドラッシュと白豪主義、映画「オーストラリア」の1部を見た感想、豪州について調べたいこと。

#### 第6週目（オーストラリア・パース、U.K.・エジンバラ）

- ①オーストラリアの小テスト（語い、内容確認）
- ②オーストラリア英語、アボリジニのボーカルグループの実話の映画（一部）を見た感想、英国エジンバラ。

#### 第7週目（U.K.・エジンバラ）

- ①スコットランドのタータンチェックについて
- ②タータンチェック2、ボランティア船で行きたい

国。

#### 第8週目（アイルランド・ダブリン）

- ①スコットランドの DVD の感想
- ②アイルランド概要（ジャガイモ飢饉→米国へ移民）  
ボランティア船で行きたい国、調べてきた事  
発表を希望するか。

#### 第9週目（アイルランド、スウェーデン・ストックホルム）

- ①小テスト（アイルランド）
- ②タイタニックの一部を観た感想
- ③ボランティア活動発表希望日、サンプルエッセイ

#### 第10週目（スウェーデン、シンガポール）

- ①スウェーデン概要、政治、経済、伝統的衣装
- ②Sweden の食文化、シンガポールのゲストに聞いてみたい質問、ボランティア活動のレポート準備

#### 第11週目、第12週目（シンガポール）

シンガポール在住のゲストスピーカーの話聞いた感想。講師は米国で ESL 教授法の学位を取得した後、シンガポールに在住。現地の大学で日本語講師と日本語継承学校を運営する。家族は4言語を駆使する。

- ①ボランティア活動の発表者（発表は基本的に英語、日本語は30%なら OK、発表原稿は十点）  
レポート提出のみの場合は、全部英語になる。

- ②サンプル原稿の説明

#### 第13週目（フィリピン、ボランティア船）

- ①アメリカ国内の経済格差  
フィリピンの国や文化の概要

#### 第14週目（ボランティア船、発表）

- ①5人発表、発表評価表（発表者名、ボランティアの内容、興味深かった点、全体の評価）

#### 第15週目（発表、まとめ試験 chapter10, 13－15）

- ①10人発表、発表評価表
- ②まとめ試験（B4, 2頁）

4. 2. 1. バーチャルボランティアについての手順  
学生の気づき、探求、思考力を高めるために第8－15週目はバーチャルボランティア活動に重点を置いた。

1. 第8週目－ボランティア船などでボランティアに行きたい国とその理由を聞いた。この時点では、出席者の3分の2程度しか回答がなかった。
2. 第9週目では、バーチャルボランティア活動について、ボランティアで行く国、滞在日数、活動内容、その国を選んだ理由、ボランティア活動の良かった点、大変だった点（模範エッセイを紹介）、を英語で回答。
3. 第10週目に、発表希望か、レポート提出のみかを

学生に確認。発表者は基本的に英語（日本語は3割くらい使用可能）、原稿はプラス点になる事とし、レポート提出のみは英語だけとした。別の模範エッセイ（実際のボランティア活動の感想文）を英語で紹介した後、最初の何行かを書き始める練習をした。

4. 第12週目に、①自己紹介②ボランティア活動の名前、③活動をした国について（正式名称、首都、人口、食文化など）、④自分が実際ボランティアをしたと仮定して、内容を過去形で書く、⑤活動の具体的な内容、⑥最後にこのボランティア活動から学んだことを書くという一連のフォーマットを呈示。
5. 第14週目と第15週目で発表、レポートのみの提出は2020年1月8日-15日とした。

#### 4. 2. 2. 評価方法

学生が毎週提出した activity sheet は採点し、なるべく次週までに返却した。印象深い感想は、授業の冒頭に紹介した。平常点（出席・宿題・activity sheet・小テスト点）を45%にし、最後の週に行った試験40%、ボランティア活動の原稿を15%にし、発表した場合はそれを加点とした。単位を修得した学生の成績の内訳は、Sが19名、Aが12名、Bが16名、Cが4名（計51名）だった。

### 5. 結果・解釈

データは、学生の補助教材やボランティア活動についての学生の意見や感想を使い、後に定性分析した。補助教材の意見は、授業内で書いたものである。感想や意見は原文のママだが、です・ます体は修正した。

#### 5. 1 補助教材からの感想や意見

第1週目の補助教材で、海外の文化などに意識を高め、気づきを促す質問を2つした。1つ目は、今一番興味のある国とその理由を聞くものである（55人中54人が回答）。多い順に、米国11人、仏7人、英国6人、独・韓国・豪 各4人、他の欧州8人、アジア諸国10人だった。理由の多くは、服飾・自然・食文化に興味があると答え、行ったことがある、友人がいるからという答えもあった。

2つ目は、World Culture Iで学習したこと等で、文化や言語の面で、夏休み中に意識した事、気づいた事を聞いてみた。実際IとIIを通年で取ったものは4-5名であることから、回答者は22名だった。5例を紹介する。

学生A：留学から帰ってきた友人にカナダの話を聞くことができた。

学生B：ロンドン留学に行って、階層の表記の仕方、‘colour’の表記を見て本当なんだと実感したこと。

学生C：学習した内容のような映画を見て理解が深まった。

学生D：テレビで、(前期に) 学習した国や現状を見て、本当にこんな感じなんだと思ったこと。

学生E：言葉と歴史はつながっていること。

第6週目アボリジニのボーカルグループの実話に基づいた映画の一部を見た感想。

学生A：彼女達の歌で人々が心動かされていく様子がとても美しかった。歌に惹かれつつも受け入れがたい世の中の状況にとて心が痛んだ。それでも強く前向きなアボリジニの人達にすごいと思った。肌の色だけで差別されているのは今もなくなっていない状況だと思うが、早くすべてなくなってほしい。彼女たちは歌という武器で戦い、人々と通じ合うことを望んだと感じた。

学生B：当時、人権が認められるようになったが、人々の生活は底辺であり、貧しかったはずだ。その時代背景に歌う彼女たちの姿は力強く、これがソウルだと感じられるメッセージ性を持っているように思えた。彼女たちにはワクワクするような魅力があり、生き抜くメッセージに感動した。

学生C：オーストラリアの「盗まれた世代」のことも知らなかった。人種的差別や戦地での苦悩を乗り越えていく姿はカッコよかった。

学生D：差別はよくない。

第9週目、タイタニックに乗船中の上流社会の人々とアイルランド移民の場面をみた感想

学生A：イギリスは階級社会がすごくはっきりしているのがよく分かった。今も変わらず続いていると聞いたので、大変だと思った。

学生B：アイルランドの音楽やダンスが印象的だった。また階級が分かれており出会うはずのない2人が出会い思い出を作るシーンがとても感動的だった。

学生C：上流階級の人々は生活が楽だろうけれど、3等(客室)の人々の方が楽しそうだった。

同じく第9週目のバーチャルボランティア活動について



て。ボランティアで行く国、活動内容など、英語で回答。  
 (提出者31名)、ケニア1名、タンザニア1名、  
 南スーダン2名、南ア1名、ギニア1名と具体的  
 な名前の他、アフリカという大雑把な表記が4名  
 あった。その他は、アメリカ5人、スペイン1  
 名、アジアは11名、フィジー2、無記入が2人  
 だった。

第11週目 シンガポール在住のゲストスピーカーの話  
 を聞き、話の内容と感想を書いてもらう。

学生A：(現地で) 日本語を学びたいと考える人が  
 意外に多く驚いた。シンガポールでは文化  
 が日本と異なるので、興味が出た。

学生B：日本の感覚でシンガポールに行くといろい  
 ろと違いすぎて大変だろうなと思った。私  
 はあまり海外に行きたいとは思わないが、  
 今回のお話を聞いて興味が湧いたので、有  
 意義な時間となった。

学生C：小学生にも卒業試験があることを知った。  
 お話を聞いて日本と比べると、日本は日本  
 で良い所があり、シンガポールはシンガ  
 ポールで良い所があるんだと思った。1度  
 行ってみたいくなった。

## 5. 2 バーチャルボランティア活動

発表した学生15名は、各々わかりやすい英語で発表  
 し、内容もバーチャルとは思えないような実体験感が  
 あった。発表中、聞いている学生は評価表に発表内容  
 を書くことにしたが、コメントを細かく書いた学生  
 と、そうでない学生の差が目立った。

次に、レポートのみの提出者の一覧である。19名  
 が、指定の書式と内容を守り、A4 (23行程度) を1  
 枚提出した。1枚以上で参考文献をつけたくれた学生  
 もいた。

英文は、サンプル通りに打ったところ以外は、多々  
 文法間違いがあったが、それは英語のサイトからその

表1. 発表した学生のボランティア活動内容

発表者	国名・場所	バーチャルボランティアの内容
Aさん	セネガル	孤児に学習支援
Bさん	ネパール	地震後の学校の再建
C・D・Eさん	カンボジア	給食配布と教育支援 (3名)
F君	デンマーク	リサイクル品でアクセサリ作り
Gさん	アルゼンチン	保護犬の世話
Hさん	スリランカ	世界遺産の保存
Iさん	インド	新しいファッションを作る
J君	ネパール	教育支援、日本について話す
		他5名

まま写した可能性の低さを表し、自力で努力した成果  
 である。今回は、文法・語彙・用語の使い方が完璧  
 で、毎週の小テストの得点とは反比例している学生が  
 3人いた。その内2人の内容は同じだった。

ボランティアの国や活動内容の選択には、ネット検  
 索、学生が行ったことがある国、留学した友達に聞  
 く、家族に聞く、テレビで観た、という理由があがっ  
 た。

表2. ボランティア活動内容 (評価点が多い順)

学生	国名・場所	バーチャルボランティアの内容
Aさん	ガーナ	Help the Poor 公衆衛生の向上
B君	カンボジア	Enjoy School 教育支援 (+4)
C・D さん	カンボジア	World Theater Project 子ども たちに映画・音楽の紹介
Eさん	カンボジア	Dress up Children 服飾
Fさん	オーストラリア	Animal Protection 動物保護 (+ 1)
Gさん	フィリピン	Art Project セブ島少数民族
Hさん	カンボジア	Safe Water 浄化水の供給
Iさん	フィリピン	Happy wearing used clothes
J君	ニューヨーク	ホームレス支援
K君	タイ	Different Cultures 文化交流
Lさん	南スーダン	WaitPerson 食事の提供
他	教育支援	インド、フィリピン、タイ、ネ パール
	文化交流	アメリカ、カンボジア (2)
	環境整備	フィリピン、アフリカ、日本 (3)
	動物保護	ケニア、英国

この課題で大事なことは、まず英語力の向上であ  
 る。この場合は特に、ライティングのフォーマット・  
 語い・表現力と、発表者は発表の仕方や読み方なども  
 重要である。また、バーチャルボランティアとはい  
 え、選んだ場所やボランティア活動の内容の他、教科  
 書やサンプルエッセイにも書かれているように、地元  
 の人達との交流や活動からどのような事を学べたかを  
 考えることである。ある男子学生は、「こども達にな  
 ついてくれて、お別れの時は涙が流れた (原文は英  
 語)」と書いてくれた程だ。

## 5. 3 後期試験内のコメントなど

後期試験は二部に分け、一部は英語力の到達度を測  
 るものだった。前半 (B4, 約1.5頁) は教科書の最  
 後の4章の、リスニング、語い・用語、内容把握につ  
 いて。受験者は、単位履修者と同じ51人だった。

後半の (B4, 0.5頁) は、(1) この授業で学習し  
 た内容で、興味を引いたものは何か、またその理由を

聞いた（複数回答可）。(2) ボランティア活動とその概念から何を学べたか、授業全体で何が楽しかったか、何が将来役立つと思ったか、を聞いた。以下は(1)の抜粋である。下線部は、学生の気づきや学生の深化した考えを表す。

表3. 興味を引いた学習内容とその理由

選択肢	合計人数と理由（複数選択あり）
1. カナダのバンクーバー（少数民族、二言語、フランス語圏からの移民の先生のDVD）	(5人)「人種差別のDVDを見た時はとても印象に残っている。今で言えばコロナウイルスで人種差別も同じなので良くない。」 「二言語に興味を持っていた。映像や内情を聞いてはっきり理解する事ができた。」「アメリカ寄りのカナダだが、文化は西洋の部分があって面白いと思った。」
2. オーストラリア（白豪主義、「オーストラリア」とアボリジニのDVD）	(10人)「白豪主義が興味を引いた。ファッションでもあるショーで問題になっていた。自分には関係ないと思って授業を受けていたが、考え方が変わった。」 「以前に行ったことがあり、歴史とかある程度知っていたため、歴史や文化について集中して学べた。」「自分の家族の体験と同調できる所があると分かった。」
3. スコットランド（タータンチェックの意味、スコットランド英語）	(6人)「タータンチェックが昔から好きだったから。」 「テキスタイルについて日々学んでいるから。」
4. アイルランド（景色・文化のDVD、タイタニックDVD）	(10人)「日本以外の国の景色や文化をあまり知らないで、こういう形で見られてよかった。」「船の下方で、下級の人々の中で踊る2人の姿から多くのことを考えさせられた。」
5. シンガポールからのゲストスピーカーの話	(22人)「衣食住の文化が深く知れてとても面白かった。」「実際に住んでいる人の話は、資料以上にわかりやすく、現地の様子が容易に想像できた。」「その国について何も知らなかったから、様々な民族が異なった服装をしている事が面白いと感じた。」「民族によって衣装が違うことや場面によって言語を変えている事が分かった。」

(2) では、この授業をとった感想として、学んだ点や反省点の他、ボランティア活動とその概念から何を学べたか、授業全体で何が楽しかったか、何が将来役立つと思ったか、を聞いた。抜粋を以下に紹介する。下線部は、学生の気づきや学生の深化した考えを表す。

表4. 授業から学んだ点、将来役立つ点

(Nさん) 日本にずっといるだけでなく、海外の事を知ると自分がどれだけ狭い世界で生きているかをすごく感じた。海外の様々な文化や現状などを知って良い所、悪い所もそれぞれあって、お互いに認め合い、助け合うことにより良い世界になるのではないかと感じた。
(E君) <u>It let me think a lot, search a lot, learn a lot that I can't learn from books, that I won't think if I don't have a chance, that I won't search it (otherwise).</u> English is important and leaning other cultures is also important now. I believe it's useful.
(A君) <u>どんな事を調べたか、そしてどんな経験をしてみたかという事を人に伝え、人から話を聞くことで知識が広がった。</u> また、レポートを書く際に、授業で扱われた新しい英文等も理解することが出来た。
(Kさん) 実際に海外でボランティアをした訳ではないのに、この授業を通して、ボランティアをしなればいけない程困っている国がたくさんあることに気づいた。その上で、日本に居ても世界に目を向けて出来ることからコツコツと貢献して行きたいと思った。また、授業全体としては、スピーチの文を考えたり、実際に人前で話すことで度胸が付き、就職しても役に立つと思った。
(Yさん) (前半略) 他の文化を知することは服のデザインをする上でも間違いなく役立つので、これからも続けていきたい。同時に日本の文化への理解を深めていくことが大切だと学んだ。
(M君) 一年間この授業を受けて、たくさんの国の歴史や文化を知れて楽しかった。話されている言語にも歴史がありいろいろな時代背景の中で生まれてくるものだと知った。そして今も世界には貧困や環境問題などたくさん問題がある事を改めて確認することが出来た。
(Kさん) 普通に生きているだけでは体験できないような事を知る授業だったと思う。色んな国の映画が見られたことが自分の中では大きくて、時代背景を知れた気がした。物事を深く知ることによって探究心を得ることをこの授業で学んだ。それは圧倒的に将来に役立つことだし、これからたくさんの事をいろんな形で知っていきたいと思えた。
(YH君) 今の時代人種差別が問題になっている。授業でもDVDでたくさん見てきたが、その問題はファッションにおいてもとても大切な事だと思う。例えば、白い靴紐は英国で白は白人を意味し、白豪主義だと問題になっていた。色だけでなく問題になっている今の時代だからこの授業はとても大切だと思った。何がダメではなくて、どうすることが過去に起きているから、こういうことはしてはいけない。原因を知る。これが一番今の私達に出来る事だと、この授業を通して学んだ。
(YK君) 実際にボランティアにいったような文章を作ったけれど、自分がその国について調べた学んだこと、皆の発表を聞いて自分の調べた国以外の国の内情が、どれだけ複雑かを考えさせられた。このボランティアを終えてふとした瞬間にニュースなどで貧困・災害等の複雑な事を見た時、自分がどのような事を思うのだろう、そしてそこから勇気を出して勢いでボランティアもしてみようという気持ちになれば良いと思うし、そのような考えが将来役立つてほしい。
(Iさん) まず、世界に目を向け、興味を持つことの大切さそして何事にも視野を広げ、いろいろな視点から見て学ぶことで、世界をもっと知り、作品やファッションを通し



て世界とつながれることがあると思うので、これから言葉はもちろん、いろいろな文化、歴史、現状を知って、自分のやることに生かしていきたい。
(Eさん) 授業のDVDを見た後、友人と一緒にDVDの感想を話し合っ意見を出したり、授業で得た知識(他の人の発表していたボランティアの内容)などをネタにして、バイト先に来る海外のお客様と少し会話をするという機会もあった。今回、自分がボランティアをしてみたという設定でレポートを書いたが、これをきっかけに、 <u>今度実際のボランティアに参加しようと思った</u> 。この授業のボランティアについて考えさせて下さる所は、今後の自分の将来に役立つと思う。
(Tさん) ボランティアの概念からは、自分達の身の回りの世界だけでなく、もっと広い視野でもの事を見る事ができる為、それにより新しい価値観を得て共有できる <u>ことを学べた</u> 。映像(DVD)を多く観れたことがとても良かったと思う。 <u>“英語を勉強する”</u> ということよりも <u>“知っていきたい”</u> と思うことが大切だと感じた。
(Sさん) この授業で、人が何を言っていて、伝えたいのかを知ろうとする姿勢を学んだ。また、いろんな人達がいる、苦しくても生きていかなければいけない厳しさを <u>知ることが出来た</u> 。
(KSさん) 海外の知識が得られたのはもちろんだけど、ボランティアの発表では、一から内容を考え実際に <u>いったと仮定して文を考えるのが、一番知識が増えたことだと思う</u> 。
(Iさん) In this class, we got a lot of information about other countries, history and cultures. Those help us understand more about diversity. In the future, we might be having a chance to experience these cultures or meeting someone with different background.
(KNさん) (一部略) 日本と海外の文化の違いを学べた事が役に立つのではないかと考えた。他の授業で、あるデザイナーが服を発表した時に、ある国からクレームを受けたことがあり、 <u>自国にとっては何でもないことでも、他国にとっては過去のいやな記憶を思い出さしてしまうという事が分かり、他の授業で学べないことをこの授業で学ばせて頂きました</u> 。
(Mさん) ボランティアについて調べたり学んだことで、その国に対しての見方が変化したり、興味を持つようになった。 <u>私達にはまだまだ知らない国の経済状況だったり、貧富の格差だったり、生活状況などを知って、少しでも私達に出来る事はないのかととても考えさせられたし、いつかボランティアに行ってみたいと思った</u> 。
(KO君) 人々とディスカッションしたり協力し合ったり、会話を楽しめたことが英語をやる気にさせたとし、 <u>知識や知恵もついた</u> 。なにより今後につながると思う。

紙面の関係で、さらに多くのコメントを載せることができないが<sup>(註4)</sup>、多くのコメントに共通したことは、「～は知らなかった」、「～が変わった」、「～ということを知った」、「～を知ることができた」、「～を考えさせられた」、「～がついた」、「～してみたいと思う」、「～してみたい」、「役立つと思う」、「生かしていきたい」などの言葉だった。

## 6. 考察と示唆

本論では、EP(探究的实践)を使って、本学の学生のやる気度をどのようにあげていけるか、自分の教師信条である-ism(差別主義)をなくすべくどのように教えていけるか、を学生のコメントを通して検証してみた。EPの進め方は厳密ではなく緩く決められていて、順序も時系列的ではなくても良いとPandhiani他(2016)も述べているように、実際は、EPが先にあって、それにワールドカルチャーの授業を分析してみた訳ではない。それとは逆に、2006年から、教養教育の英語の授業に教師の専門性を生かすべく試行錯誤で行ってきた概念と英語力を高める授業を本学でも実施してみた結果、EPの研究手法と目的にあてはまる事が図らずもわかったという方が当てはまる。

昨今、日本の大学生の留学離れが問題になっている。ネットの世界では、軽く国の枠組みを超えて行く現代の若者は、海外のことだけでなく、日本に在住している外国人にも興味がないと言われてきた。前期で履修した学生は、教室内のスマホ、おしゃべり、居眠り、遅刻や教科書を買っていない者が散見され、教師のやる気も下がるほどだった。しかし実際は、7割の学生は宿題も課題も真面目にこなしてきていた。そのような学生も、教室内で発言するのが苦手だったり、こちらから近づいていくと距離を置きたがったりする学生が多く、学生と相互間の意思疎通をとることが難しいと感じた。

長年の経験から、英語力が低いからと言って、そのレベルに合わせると高校の復習のような教科書になり、学生のやる気度と知的刺激は逆に下がる(杉野2016)事は分かっていたが、選んだ教科書はやはり学生の平均のレベルより少し上だったので、英語力自体も上がったかどうか、2019年前期が終わった時点では不完全燃焼を感じた。

そこで、後期の始めに目標とした事が、探究的实践の「問いかけ(inquiry)」になった。それは、「このクラスの現状を踏まえ、どのように学習者の英語力をあげながら持続可能な多様性と包括的な文化観を持ってもらえるか」である。

第1週目から第6週目の「カナダのバンクーバー」、「オーストラリア、パース」「アイルランド、ダブリン」を通じて学生に伝えたかったことは、美しい風景と大衆文化の陰に、少数民族や移民の歴史があり、文化の多様性を作りだしているということだった。

「-ism(差別主義)」については、いじめなどトラウマを抱えているかもしれない繊細な現代の学生に、あまり直接的な生々しい表現を使わないで教えること

を心がけた。アボリジニについての学生のコメントは、「人権が認められるようになったが、人々の生活は底辺であり、貧しかったはずだ。」「オーストラリアの『盗まれた世代』のことも知らなかった。人種的差別や戦地での苦悩を乗り越えていく姿はカッコよかった。」「白豪主義が興味を引いた。ファッションでもあるショーで問題になっていた。自分には関係ないと思って授業を受けていたが、考え方が変わった。」「差別はよくない」などがあった。

また表3の「この授業で学習した内容で、興味を引いたものは何か」の回答に、多くの学生が、カナダ(少数民族、二言語、移民の先生のDVD)と、オーストラリア(白豪主義、アボリジニのDVD)を選択した。また、その理由としてあげた学生の繊細な気持ちや他者に対する思いやりのコメントから、差別について考えることの意義はあったと思う。

第11週目に、シンガポール在住の元同僚の女性ゲストスピーカーに、多民族・多言語国家のシンガポールについて話してもらった。その際に、ゲストが話している内容とコメントを書く activity sheet を渡した。それを集めてコピーしたものをゲストに渡したところ、「話の間、学生があまりにも反応がなく、興味を示さなかったので、不安に感じたが、activity sheet を見て、しっかり聞いていた事とたくさんの素敵なコメントをもらってびっくりした。はっきり意見を言うシンガポールの学生とは全然違うんだ」と嬉しい驚きを表していた。5.3の(1)でも学習内容でシンガポールのゲストスピーカーの話が一番面白かったと答えた学生が22人いたことから分かる。

バーチャルボランティアに関しては、本学の学生がどの程度反応してくれるのかは未知のものだった。どこの国でボランティア活動をするのかを決めることが、一番大事な点ではなかった。大事な点は、どこの国にしようか、そこで何日くらいいるのか、そこでどんな活動をするのかを考えることだった。実際、第8週目に初めて聞いた時は、出席者の3分の2程度しか回答がなかった。第9週目で、大分具体的になったが、アフリカという大雑把な括りが4名もいた。

その後、5.2の発表とレポートの結果の一例として、「(A君) どんな事を調べたか、そしてどんな経験をしたかという事を人に伝え、人から話を聞くことで知識が広がった。また、レポートを書く際に、授業で扱われた新しい英文等も理解することが出来た。」や「(KSさん) ボランティアの発表では、一から内容を考え実際にいったと仮定して文を考えるのが、一番知識が増えたことだと思う。」と英語力とコミュニケーション力が伸びたと感じた学生と、Mさんのよ

うに、「ボランティアについて調べたり学んだことで、その国に対しての見方が変化したり、興味を持つようになった。私達にはまだまだ知らない国の経済状況だったり、貧富の格差だったり、生活状況などを知って、少しでも私達に出来る事はないのかととても考えさせられたし、いつかボランティアに行ってみたいと思った。」というように、気づき→知識の獲得→持続可能な多様性は、Allwright (1997) が提唱した、EPは斬新で、持続的で恒常的な概念を持った、実践授業を研究対象とする研究手法であり、「どのように学習者の英語力をあげながら持続可能な多様性と包括的な文化観を持ってもらえるか」という筆者の「問いかけ」の答えにもなる。

前述のように、EPでは、学習者は授業内で起きていることを理解するために、教師と共に「問いかけ」を解決する「協働実践者」である、「I, I, I 他(一人称複数)」の協働の視点から見ていくという点で、教師が学生を「問題」と見なして、問題解決(fact finding)をしようとする、アクション・リサーチと差別化している。

協働実践者としての本学のワールドカルチャーの学生達は、「現代の学生は、留学や世界に興味がなく、他者とのかわりが苦手だ」という社会の評価や、「英語の到達レベルが低い学生は、4つのスキルを伸ばす教科書を使い、basic skill を上げ、考え方や知識の深化は教えなくて良い」という一種の色眼鏡的な英語教育の見方を見事に覆した。また、EPは、「一般法則(generalizable truth)を見つけることなく、「その土地や環境に合った理解(localized understanding)」を見つけるということで、杉野服飾大学という localized understanding を深める要因になったと推論される。

柳瀬(2008)は、このEPの欠点として、「自己満足に終わりがねない」ことをあげている。そのようにならないためには、やはり協働者としての学生の反応結果を発表する、それらを次年度の授業に反映することは大事だと感じる。例として、文化面でも必ず服飾についても紹介する、人種差別など社会問題になったデザインやデザイナーを紹介など、実際2020年の前期に取り入れてみた、シンガポールのゲストスピーカーを通して、日本人学生の気質を再考してみたなど、教師側にも気づきになる。

前述のように、研究や論文を書くためにEPを始めたわけではなく、本学の学生の反応、コメントがあまりにも良かったので、それを知らせる必要を感じた所に、EPに出会えて、二重に幸運だった。

最後に、この授業が、探究的实践(EP)の最も重

要な目的である「人生の豊かさ (Quality of Life)」を高めたかどうかは断言できないが、学生の反応を見る限りではそのように言えるではないかと思う。

#### 註)

1. 文科省は、「エージェンシー」を「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく姿勢・意欲」と説明している。
2. 2020年度前期の Zoom 授業の履修率は、68人中62人が単位を修得した。
3. 2019年度入学の高校1年生から「総合的な学習の時間」が探求重視になった。この場合探求を「inquiry」と訳すことが多いが、ここでは exploratory (探求) と差別化するために、問いかけと訳す。
4. その他の学生のコメントとして、「DVD は英語が聞き取れなくても理解することが出来て楽しかったが、英語のリスニング力が低すぎてスピーチの内容が分からなかったことだ。発音もきれいで素晴らしい体験を語っているはずなのに、一部の単語しかわからず、内容は想像していた。わからないなりに話して人の目や口、身振りを見て知ろうとしていた点は、英語に関係なく将来役立つと思った」や、「世界は英語をしゃべる国が多く、国際化がどんどん進んでいるように感じる中で、英語の重要性を改めて学んだ。ただ英語を学ぶのではなく、動画を見て国の文化を知ったり、映画を見て知ったりすることがとても楽しかった。同じ英語でも、日本になまりがあるように、その国々でなまりというイントネーションが違うことも知れた。将来、絶対に日本に外国の人は増えると思うから、今英語を学んでおけば、会話などで役に立つと思う。」などもあった。

#### 謝辞)

本原稿の執筆にあたり、助言を頂いた千葉県立保健医療大学の植田麻実氏と、本学に勤務する機会を与えて下さった宇都宮大学の三村千恵子氏の両氏に深く感謝申し上げます。また、協働する喜びを経験させてもらった2019年後期のワールドカルチャーを履修した学生一同に御礼を申し上げます。

#### 参考文献

蒲原順子 (2020) 「世界の様々な英語についてどのよ

うに教えることができますか」 杉野俊子監修、田中富士美・野沢恵美子編著『英語とつきあうための50の問い』、146-156、明石書店。

国際文化フォーラム (2013) 「外国語学習のめやすー高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」 ココ出版。

佐藤学 (1992) 「パンドラの箱を開く＝授業研究批判」『教育学年報1 教育研究の現在』 63-88, 世織書房。

杉野俊子 (2016) 「グローバル化における英語教育の一方方向性：一般英語の授業でスキルと知識の定着を図る試み」『國學院大學 教育開発推進機構紀要第7号』平成28年3月、1-15。

杉野俊子 (2020) 「英語の広がりについて研究者はどのように考えていますか」 杉野俊子監修、田中富士美・野沢恵美子編著『英語とつきあうための50の問い』 146-156、明石書店。

西野孝子 (2011) 「コミュニケーション・アプローチに関する日本人高校英語教師の信条と実践」、『JALT Journal』 vol. 33, No. 2, November 2011。

平塚貴晶 (2015) 「日本における探究的実践活動 (EP) の一例：言語教師のエージェンシーに焦点を当てて」『琉球大学欧米文化論叢集 No. 59 (2015/3)』 25-46 (英文論文、Hiratsuka, Takaaki)。

三上明洋、三上由香 (2015) 「アクション・リサーチによる大学英語授業における多読活動の導入とその改善」『全国英語教育学会紀要』2015年第26巻、429-444。

柳瀬陽介 (2008) 「Exploratory Practice の特質と「理解」概念に関する理論的考察—アクション・リサーチを超えて—」『中国地区英語教育学会研究紀要』 No. 38 (2008), 71-80。

和田多鶴 (2010) 「授業研究 ナラティブによる発信学 L2 教育：経験の語りの向こうに」『杉野服飾大学、杉野服飾短期大学紀要 9』, 71-84。

Allwright, D. & Lenzuen, R. (1997). “Exploratory Practice”, work at the cultura inglesa, Rio De Janeiro, Brazil, in *Language Teaching Research*, 1. 1, pp. 73-79.

Allwright, D., & Hanks, J. (2009). *The developing language learner: An introduction to exploratory practice*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Borg, S. (2001). Self-perception and practice in teaching grammar. *ELT Journal* 55 (1), 21-29.

Borg, S. (2006). *Teacher cognition and language*



- education. Research and practice*. London: Continuum.
- Dogruer, N, Menevis, I. & Eyyam, R. (2010). EFL Teachers' beliefs on learning English and their teaching styles. *Science Direct Procedia Social and Behavioral Sciences* 3, 83–87.
- Griffo, Mara R.D.A. (2017). Mindfulness and exploratory practice: A way of being in the classroom. Monograph for *Departamento de Letras, Pontificia Universidade Catolica do Rio de Janeiro*, pp. 1–63.
- Hanks, J. (2017). *Exploratory Practice in Language Teaching- puzzling about principles and practices*. London, U.K.: Palgrave MacMillan
- Hanks, J. and 10 others (2016). Why exploratory practice? A collaborative Report. In *ELT Research Issue 31*, February 2016, 6–9.
- OECD (2009). Teaching practices, teachers' beliefs and attitudes. In *Teaching and Learning International Survey (TALIS)*, total 309 pages, pp. 87–135. OECD Publishing.
- Pandhiani S. M., Chandio, M. T., & Memon, S. (2016). Exploratory practice: Uses and implication. *ResearchGate*. Retrieved on 08/10/2020 from <https://www.researchgate.net/publication/304114468>
- Slimani-Rolls A. & Kiely, R. (2019). *Exploratory practice for continuing professional development*. London, U.K.: Palgrave MacMillan.
- Sugino, T., Abe, E., & Ueda, M. (2017). Coping with teacher demotivation toward directed motivational currents. *Journal of Literature and Art Studies Vol. 7 No. 5*, pp. 555–567, David Publishing Company, May 2017.
- Sugino, T., Ueda, M. & Abe, E. (2018), *Teacher Beliefs in College English Classes in Japan: How and How Much to Reflect them?* Unpublished paper presented at 2018 JUSTEC in Sep. 2018.